

日本語「のだ」に内在する認識プロセス

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科
(2004年9月30日受付、2004年11月5日受理)

概要

日本語の文末に現れるムードの「のだ」は、これまでそれに前接する部分の内容が既定の事態であることを表す場合に現れる、使用されるとされてきた。ここではその「のだ」が「の」と「だ」の組み合わせであるが、「の」が認知したばかりの事態や既に前から把握していた事態に対し、「の」が認識したり、再認識したりする話者の心的認識プロセスを経由したことを表示するものであり、「だ」の断定と結合していて、これはすべての「のだ」に共通する性質であると提案し主張するものである。この認識、再認識プロセスの際に広い意味での話者による“評価”が加わり、それが「のだ」が使用される条件としてこれまで述べられてきた「のだ」の用法分類になっているわけである。これまで“既定”と言われてきたことは、この話者による“評価”の1つの場合であるとみなせることを示す。そして、なぜ「の」がこのような機能と結びついているのかをさらに説明するものとして、他の箇所でも頻繁に現れる「の」の現実指向性が基にあるのではないかと推測するものである。

[1]問題提起

ここでは、日本語の文末に現れる「のだ」の意味・機能について考察する。このことに関して、すでに多くの研究があるが、その集大成としてまとめられた野田春美の『『の（だ）』の機能』を、本論文を展開する上での基準として利用させて頂くことにする。

本論文での目的は、「のだ」の持つ一見様々な意味・機能について、どのような原理が元になっているのかを探り出し、その原理によりどの程度他の例文を説明できるのか、を見ることである。具体的に言うと、「のだ」は明らかに「の」と「だ」の二つの要素から出来ているが、それぞれの要素がどのような単独の意味・機能を持っていて、それらから「のだ」の全体的意味・機能がどれだけ合理的に説明できるか、を示すことがここでの最大の目的である。野田は「のだ」の用法を、スコープの「の（だ）」とムードの「のだ」に二分しているが、以下では「ムードの『のだ』」に限定して考察し、最後に「スコープの「の（だ）」について触れるだけとする。以上のように、野田の『『の（だ）』の機能』を全面的に基にしているので、ページ番号だけを記している場合は、野田の用例や説明がなされているページを表すものとする。何も記していない用例は河本が作ったものである。

[2]塊としての「のだ」の機能分類

まず、用語を定めておく。

- (1) 「咲かないよ。旅行にいったんだ。」 (p. 62)

P Q

- (2) そうか、このスイッチを押すんだ！ (p. 64)

Q

野田にしたがって、「のだ」が用いられた文において、「のだ」に前接する部分をQ、Qの原因・理由などを表す部分をPとする。(2)はQだけの文である。

「のだ」について、これまで多くの研究がなされてきており、「のだ」が現れる状況、条件については研究し尽くされている感がある。それらをまとめたものが野田の「の（だ）の機能」であると考えられるが、野田は其中で「のだ」の用法を次のように分類している。この表については平叙文のル形に限ったものであ

る。(p.67)

| | 対事的ムードの「のだ」 | 対人的ムードの「のだ」 |
|-------|----------------------|----------------------|
| 関係づけ | Pの事情・意味として Qを把握する | Pの事情・意味として Qを提示する |
| 非関係づけ | Qを(既定の事態として) 把握する | Qを(既定の事態として) 提示する |

対事的と対人的とを簡単に言えば、対事的とは必ずしも聞き手を必要としない、ということであり、対人的とは、必ず聞き手（読み手）を必要とする、ということである。

表の中の「既定の事態として」やPとQの「関係づけ」といったことに関して、河本がこれから新たな分析視点を提案しようとするものである。この点に関連すると思われるが、例えば森田良行は次のように書いている。

- (3) 「早く逃げるんだ」(p.185: 森田)
- (4) 「さ、車から降りるんだ！」(〃)
- (5) 「めそめそ泣いてないで説明するのです！」(〃)

これらの例に対し、「その事柄が間違いないこととする確定的態度が「の」や「ん」を使わせているわけであるが、このような主観的判断だけでなく、外界の状況や場面、話題の内容等から確定的なものと判断した場合も『…のです／…んです』が使われる」と述べている。これは野田の表で「非関係づけ」と「対人的ムードの『のだ』」の交差しているところに該当しており、森田の“確定的”というのが、おそらく野田の“既定の”に相当していて、同じ捉え方である。

このように、野田と森田の記述を比較してみると、「のだ」の用法の分類ということでは基本的に同じであると思われるが、野田のものはずっと細かく分類・整理してある。そういった意味で繰り返になるが「のだ」の用法については出し尽くされてきていると言えよう。

ムードの「のだ」の性質に関して、野田は「前接する部分Qで示される内容を、話し手が既定の事態として捉えること」であるとしている。(pp.64-6)これは今見たように、森田も同じであろう。しかし、野田は、これが「のだ」の“本質”であると言い切ることに問題があるとし、次の3点をその理由として挙げている。

- ①「の」によって名詞化された部分で示される事態を既定のものとして扱うというのは、ムードの「のだ」に独自の性質ではない (p.66)
- ②「既定」というのが、かなり抽象的だということである。「既定の事態として捉える」というのは話し手の捉え方であり、「Qが実際にすでに成立している」ということとは同一ではない
- ③ムードの「のだ」のすべてが、Qを「既定のものとして捉える」という性質をもっているとは言い切れない

これらの問題点を踏まえた上で、野田は「ムードの『のだ』の本質は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表す」と言うに留めざるを得ないとしている。このことは、「のだ」の性質として「既定の事態として把握する、捉える」ということについて、野田もその限界を認めるものであり、より基本的なものからこの既定性ということの意味の1つとして説明するような原理が望まれるわけである。②、③については河本も全く同感であり、「のだ」の性質の1つは「話し手が既定の事態として捉える」ことであると考えが、このことのより根本的な原理が何であるか、を知りたいのである。河本がここで目指しているのは、この「のだ」の本質を探ることで、「のだ」の用法について新たな事実を見出したり、新しい分類を示そうとするものではない。

次の野田の例を見てみよう。

- (6) あ、雨が降っている。(p.66)
- (7) あ、雨が降っているんだ。(〃)

確かにこの例では、(7)の「『雨が降っている』という事態がすでに成立している場合に自然に用いられる」(p.66)という野田の説明はなるほどと思うと同時に、それは(6)でも同じではないかとも思えてくる。別のと

ころで野田は、「気づく前からすでに『雨が降っている』という事態が存在していたと話し手が捉えていることが示される」(p. 81)と述べているが、河本としては、どうも既定の事態として捉えているというところが語感として納得がいかない。それに対し、次の例はどうか。野田は既定の事態であることを聞き手に伝えようとしているのではなく、先行文脈の内容をより「具体的」に示そうとしているだけのものだという。

(8) それから三か月ほどたって、トシエちゃんは会社をやめた。(p. 97)

「これから青年実業家をつかまえにいくからね」

そうやって手を振って会社から去っていったのである。

さらに次では野田は、告白のニュアンスを帯びると言う。

(9) 「さっきの女の人、恋人？」(p. 99)

少し間をおいてから、兄は答えた。「女房だよ」

それにはショックを受けなかった。だが、次の言葉には、軽いめまいを覚えた。

「子供もいるんだ。この秋で四歳になる」

これら是对人的用法であり、野田はこれら2つの例は「聞き手は認識していないが話し手は認識しているQを既定の事態として提示し、それを認識させようという話し手の心的態度を表す」(p. 98)と述べているが、「既定の事態として提示し」というところが、無理なこじつけに思われる。「のだ」に前接する部分が既定であることを聞き手に伝えようとしていると河本にはどうしても思えない。

以上の例に示されているように、野田は「既定の事態として把握する、捉える」ことを「のだ」の重要な性質であるとしながらも、その機能が果たされていなかったり、それが強くは働いていない場合があることを認めていて、野田の迷いがそのまま説明に表れているように思われる。

その他多数の「のだ」の例文を目にし、日本語が母国語である河本の語感で比較してみると、「のだ」の文に共通する表現効果として次のことが分かってきた。それは、「のだ」が使われている文は、その文が文脈の中でなぜかぴったりとその位置に収まること、そしてその文は、単なる出来事の叙述ではないということである。「のだ」に前接する部分の命題としての意味とは別に、話者が命題に対して既定であるとみなしているというより、命題とそれに関わる他の事柄との関係についての話者の思いと言ったほうが近いものである。それをまとめてみると次のようになる。

全体的原理(T)：「のだ」の場合には、それに前接する部分を、当該発話状況の中での話者による“評価”と合わせて提示する

「のだ」を総括するような機能として、この原理(T)は、野田の「ムードの『のだ』の本質は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表す」と同じく、かなり広く捉えたものになっているが、少し具体的なものになっていると思う。野田の言う「既定の事態として把握する」という部分が、話者の評価と捉え直したもので、これなら様々な「のだ」の使われ方がすべて説明できそうである。この原理(T)によれば、(6)では他の事柄は念頭に置かず、単に「明日は雨である」と主張するものであるが、(7)では「明日は雨だ」ということを、何か他の事柄(出来事、概念、…)との係わりを基にした話者の心的態度とともに表出しているということになる。例えば(7)では「自分が前もって計画していたことに影響が出て困るんだ」のような話者の心配が感じられたりもするが、それを原理(T)はカバーできていると思う。つまり、野田が「のだ」の重要な性質としている「既定の事態として捉える」というのが、河本では、Qの内容に対する話者の広義の評価ではないかということである。野田にも例文には既定の事態と捉えている例が多いが、どれも話者による“広義”の評価の違いに過ぎず、少なくとも既定性が関係しているというのは強引な解釈に思えてくる。また、例えば(8)の例の、「あきれたものだ」といった意味など、Qを、当該の状況の中でのQを取り巻く様々な事柄と絡めて考えた話者の思いが込められていることが分かる。単に既定というのでは、上記の例で見たように、あまりに狭く無理な捉え方である。野田もはっきりと既定性ということに反する例として次のものを挙げている。

(10) 香織 「来年、どうなってるのかな……私……」(p. 66)

野田は、この例に対して「Qが既定の事態として捉えられているとは考えにくい」と述べ、この「既定」という概念を「ムードの『のだ』の本質とはしない」とするが、それでもなお、既定ということが「ムードの『のだ』の重要な性質」であるとしている。既定性というのは、既定ということが存在する状況の中で現れる「のだ」の1つの意味に過ぎないと見るべきではないか。河本は、「既定」ということを含むより一般的な「のだ」の性質が全体的原理(T)として捉えられ、これを塊としての「のだ」の本質とみなせないか、と提

案するものである。

[3]「の」+「だ」から見た「のだ」

塊としての「のだ」の機能は前節で述べたものであるとした場合、その全体的機能がどのようにして生まれてくるのかをここで探ってみることにする。そのために、「のだ」の「の」、「だ」の部分について、それぞれが持っている機能を考察することから始める。

「だ」による話者の断定性

まず、「だ」について考察してみることにする。「雨が降っている」、「雨」という文に対して、すぐに思いつくだけでも、次のようなモダリティを付加することができる：

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| (11) a. 雨が降っている。 | h. 雨だ。 |
| b. 雨が降っている <u>のだ</u> 。 | i. 雨 <u>なんだ</u> 。 |
| c. 雨が降っている <u>ようだ</u> 。 | j. 雨の <u>ようだ</u> 。 |
| d. 雨が降っている <u>らしい</u> 。 | k. 雨らしい。 |
| e. 雨が降っているに <u>違いない</u> 。 | l. 雨に <u>違いない</u> 。 |
| f. 雨が降って <u>はいない</u> 。 | m. 雨 <u>ではない</u> 。 |
| g. 雨が降っている <u>のです</u> 。 | n. 雨 <u>なんです</u> 。 |

これらの文が表す意味を比較するまでもないが、明らかに「だ」は話者の断定を表していることが分かる。「です」については、「だ」に相当するもので聞き手に対する丁寧体であって、これ以外の特別な意味があるとは考えられない。

「だ」の区切り性

「のだ」が「Qのだ」あるいは「PはQのだ」において文末に来ていることから、「のだ」がQ部分だけであるという範囲を示していると考えられる。

(12) あ、雨が降っているんだ。

(13) あ、雨が降っているし、風も吹いているんだ。

「のだ」による名詞化が、前接するQの命題内容には関係がない、言い換えれば、「のだ」自体が当該の命題に対し、命題に絡む実質的な意味を付加していないことから、「だ」によりQの部分が「これだけである」ということを示す区切りの機能を果たしているとも考えられるが、これはあまり有意義な認識というわけではないだろう。ただ、次の2文を比較すると、

(14) *「雨」

(15) 「雨だ」

ここでの「だ」の区切り性と、前で見た断定性により、(15)は適格であるが、(14)はその両方の点で不適格になると説明できる。

ところが、野田では次のように塊としての「のだ」は関係づけを行う機能を持っている、と見ていることになる。

関係づけの対人的「のだ」は、聞き手は認識していないが話し手は認識している既定の事態Qを、状況や先行文脈Pの事情や意味として提示し、それを聞き手に認識させようという話し手の心的態度を表す (p. 94)

そのような観点から眺めてみると、「Qのだ」あるいは「PはQのだ」の「Qのだ」の部分は、Qで示される事態を名詞の塊として区切って提示する、ことしか言葉としては述べられていないことに気づく。つまり、「のだ」の文はPなしに、あるいはPに対して、名詞の塊を話者の断定性を持って提示しているだけである。Pに対する関係は、実は何も関係を意味する語彙によって表されているわけではないのである。このことから「のだ」の意味・機能が多岐に亘っているのは、「の」による名詞化を行う際にそのようなものが生まれてくるのではないかと、との推測が働くわけである。したがって、次に「の」について、その名詞化の一般的特徴を探るという視点から考察してみることにする。

「の」の名詞性

単独の「の」についてすでに多くの研究があるが、「の」がその前の部分（前接する部分）を名詞化するものであることに間違いなからう。名詞化する機能があるからこそ、次のようにさまざまな箇所に現れ、そしてそれらは皆、単独の名詞で置き換わる位置でもある。

(16) 良子がそこへ行くのは知らなかった。

(17) 良子がそこへ行くのを、何とか止めることができた。

(18) 良子がそこへ行くのに、どうして何も言わなかったのだろう。

ここで、「の」に対し(16)ではそれを「こと」に置き換えても文としては適格であり、名詞化という意味では同じであろう。それが(17)ではやや苦しく、(18)では無理であることから、「こと」との比較で「の」の特徴が見えてくるかも知れない、と期待できる。

「の」の現実指示性

「こと」と「の」の違いを見てみよう。(○は適格で、△は不適格、×は非文を意味する)

(19) 直子が来る△こと／○のを知っていますか。(p. 86)

(20) 直子が来る○こと／△のを信じますか。

さらに類似の例を並べてみる。

(21) 直子が来る○こと／△のを誰から聞きましたか。

(22) 直子が来る○こと／×のはいつ知りましたか。

(23) 直子が来る○こと／×のはないでしょう。

(24) 事故が起きる○こと／△のは想定していなかった。

(25) 事故が起きる△こと／○のは仕方がない。

(26) このような状況なら、事故が起きる○こと／×のをなぜ予見できなかったのか。

(27) 事故が起きる×こと／○のは時間の問題だった。

(28) そこへ行く×こと／○のは誰にしようか。

(29) 彼が赤信号を渡る×こと／○のを見た。

(30) 太陽が地球の周りを回っている○こと／×のは、現在、誰も信じていません。

これらの比較から見えてくるのは、「の」が現実的・具体的事態を指し示す指向性を持っているということ。それに対し「こと」は非現実的、抽象的な傾向を持った把握である。このことは例えば(19)、(20)について言えば、「の」が「名詞化した部分が表す事態がすでに定まっている場合に用いられやすい」(p. 65)と野田がコメントしていることに相当するのではなからうか。

特に次の文を対比することにより、「のだ」の原理が見えてくるように思われる。

(30) このスイッチを押す。

(31) このスイッチを押すんだ。

(32) 息子はやっていません／ない／ないです

(33) 息子はやっていないんです。

これらの例文の対比も、前の例と同じく、「の」による名詞化が、現実的・具体的事態への指向性を強く示しているように思われる。この「の」の名詞化の際の現実的、具体的なものへの指向性は、話者が認識する際の特徴であり、それは聞き手のそのような把握の特徴でもある。したがって、次の重要な原理が得られる。「のだ」における「の」は、それに前接する部分を単に名詞化するだけでなく、

根本的原理(S)：「のだ」の「の」は、事態(考え)を名詞化して提示する + その内容が話者の心的認識行為を経たことを示す

というように、2つの要素に分解できるのではないかと、ということである。「の」によりそれに前接する事態が名詞化されるが、さらにその事態に対し「話者が心的認識行為を行ったことが表出される」ということである。この話者による心的認識行為の表出というのは、「のだ」以外で現れる「の」にも共通しているのではないかと、思われるのだが現段階では河本の推測の域を出ない。

(35) 直子が来るのを知っていますか。(p. 65)

(36) ??直子が来るのを信じますか。

(37) 直子が来ると信じますか。

(35)、(36)での「の」による適格性の違いに関し、野田は「の」が、『知る』のように、名詞化された部分で表される事態がすでに定まっていることを前提とした述語の場合に用いられやすい」としているが、上記(27)、(28)などの例から、これはすべてが既定ということではカバーできないことは明らかである。(27)、(28)の両方とも、問題の事態は未来を表している。そうではなく、「の」に前接する部分が現実を具体的に指し示すものとして捉えられているのか、それとも抽象的な考えの段階のものとして捉えられているかの違い

であると思われる。前の「こと」との比較で言えば、「の」による名詞化は現実的・具体的事態把握に向かった名詞化であるのに対し、「こと」による名詞化は抽象的事態把握に向かった名詞化であると特徴付けられる。

このような心的認識行為（プロセス）の経由を示す「の」の有無は、話者の発話時における選択肢の1つであり、その意味でいわゆるムード表現の1つと見ることができる。その事態が認知を伴う事態の場合には、話者が“認知”する段階では事態は同じものである。(17)の雨の例の2文で言えば、状況認知が関係していて、その点では全く同じであるが、その後、そのことに関する広義の“評価”を行っているかどうか、即ち心的認識行為の有無が「の」の出現に呼応するということになる。広義の“評価”というものが、各「のだ」の文でどうなっているのかをはっきり意識することは難しいが、「のだ」がない文と比較してみると、「のだ」の文では一様に「のだ」に前接する命題に対する心の動きが感じられる。これを河本は、その命題の（再）認識行為ではないかと考えるものである。ただ、この「の」の機能は、「のだ」の形のときに、即ち「だ」という話者の断定が続くときにははっきりと感じられるものであり、「のは」や「のを」の場合には、この機能はやや弱く感じられるが、この点については今回は深入りしないことにする。

以上、前節から2つの原理を提案したわけであるが、これらは日本語話者としての内省を基に引き出したものである。全体的原理(T)も根本的原理(S)もいわば帰納的に得られたものであるが、この2つが、これまで「のだ」の用法とされてきたものをどれだけうまく説明できるかが、これら原理の妥当性を評価することになろう。これは次節で見ることにする。

「の」による客観性

「の」による名詞化によりどのような現象が起こるのかについては、記述されたものがありそうだが河本はまだ目にしていない。まず、次の2つを比較してもらいたい。

(38) 私は明日東京に行きます。 (予定、意志)

(39) 私が明日東京に行くのは誰から聞いたのですか。 (予定)

(39)では下線部は、意志性が全くなくなっている。主語の意志性を出そうとすると

(40) 私が明日東京に行きたいというのは誰に聞いたのですか。

のように意志をはっきりと示す語彙を用いる必要がある。同じく

(41) a. 部長は明日東京に出張するんだ。

b. 部長は明日東京に出張されます。

c. 部長が明日東京に出張されるのはご存知ですか。

d. 部長が明日東京に出張するのはご存知ですか。

e. 部長が明日東京に出張されるんだ。

これらの比較から、「の」節においては敬語を使うこともできるが使う必要もないことが分かる(aとeより)。また、「のだ」の前で敬語を使うこともできるが、使わなくてもよい。これらの事実は「の」による名詞化即ち従属節化が客観化の傾向性を持っていることを示しているように思われる。さらに次の例を見てみよう。

(42) 和田 今話題の『エレファント・マン』とか、ああいうものはご覧になっていますか。(p.140)

向田 見てないんです。あれとか『ブリキの太鼓』あたりは見たいなと思っているんですけど。

(42)' 見てません。

(43) 「薬は効いてますか」(p.140)

「それが、あんまり呑んでいないんです。」

(43)' 「それが、あんまり呑んでません。」

「まだ見ていません」、「あんまり呑んでいません」というのではぶっきらぼうであるが、この印象を除いているのが「の」ではなかろうか。「の」が全体として丁寧な応答の印象を作り出しているのであろう。佐治圭三の主張として野田が引用しているように、名詞化するということが、「話し手の主観からはなれたところで成立していることがらとして提出する」(pp.64-5)ことだということとは同じであろう。話者の意志性がなくなるのと反対に、同じ原理で「のだ」による名詞化は丁寧さを出すのではなかろうか。

「のだ」の類似表現

「のだ」の中の「の」による名詞化が話者の認識プロセスを経由したことを表出する際、「のだ」に前接する事態を全体的に認識していることがその際の特徴であることが、次のように「わけである」などとの比較で分かってくる。

(44) そうか、そのために集められたわけだ。(p. 220)

(45) そうか、そのために集められたんだ。

「わけ」の場合には、事態を理由として捉える認識の仕方である。それに対し、「んだ」の場合は全体的捉え方、認識である。

また、野田の指摘にもあるように、

(46) そのことだけが心残りに感じられる太郎であつた。(p. 103)

の「太郎」も「の」と共通しているように思われる。「である」「であつた」に前接する部分で、「の」や「太郎」を最後に位置させることにより、発話の時間経過の中でそれらの部分にスポットライトを当てる構造になっているといえるのではなからうか。したがって「のだ」の場合に、「の」が話者の認識プロセスを経由したことを強く表出するのは、後に「だ」の作用が伴った場合であるが、それは事態全体の(再)認識にスポットライトが当てられている表現形式とも結論付けられる。こちらあたりにも「のだ」の本質が潜んでいるように思われる。「のは」や「のを」の場合は、「の」の部分で話者の認識プロセスが強く反映されているとは思えないが、作用が弱い形で同じように働いていると考えてよいのではないかと思うが、これは今後の課題である。

「のだ」と話し手の意志性

野田は、「話し手の発話時の意志をそのまま述べるような場合には『のだ』は不適切」で、それは「前接する部分Qで示される内容を、話し手が既定の事態として捉える」ことに反することから来るものだと考える。例えば次の例である。

(47) *どうしよう……。うん、やっぱり行くんだ。(p. 94)

しかし、そのように考えれば次も同程度に不適切であるように河本には感じられる。

(47)' どうしよう……。うん、やっぱり行く。(〃)

河本には(47)も(47)'もどちらも実際の使用場面として適当な状況が思いつくのだが、その状況は当然異なっていて、(47)の場合は決意に関係している状況が思いつく。したがって、意志を述べる文では、既定ということを前提とした「のだ」が適しないという野田の主張は修正を要すると言わざるを得ない。やはり、「のだ」の文では、河本の言う事態を心的認識プロセスに經由させることが「のだ」で表出され、その際、その事態の状況の中での評価が行われるが、その意味で上の両文は河本には不自然ではない文になる、とうまく説明できる。

また、発話時の意志でありながら、次の(48)では適格性に問題はないと思われるが、これらの例は上の野田の主張と正に逆になっていると思われる。

(48) どっちに行こうか……。えーい、右に行くんだ。

(48)' *どっちに行こうか……。えーい、右に行く。

つまり、(48)は決意を表しているが十分に適格である。したがって、意志に対しても話者が認識プロセスを経由させたことを表出する「のだ」が使えることが分かる。したがって、これらの観察は、これまで言われてきた「既定の事態として捉える」というのが、「のだ」の本質であることに問題があることを示していると言える。

野田もこちらあたりのことに気づいており、次の例では「のだ」が使われているが、「Qが既定の事態として捉えられているとは考えにくい」例であると指摘している。(p. 66)

(49) 「奥さん、テレビは、どこに置くんですか？」(p. 130)

(50) 井上 小さいとき、どんな小説をお読みになっていたんですか。(〃)

また、次の例についても同様である。

(51) (犯人をつけていて)「どこに行くんだ」

「どこへ行くか」を犯人がすでに自分で定めていることを踏まえての「んだ」の使用というよりは、「どこへ行く」ということに対する話者の認識プロセスの經由及びこれに伴う広義の“評価”、例えば、「犯人の行動意図が理解できない」といった苛立ちの気持ちを表していると見たほうがよいと思われる。同じく、次は野田が既定性に反する例として挙げているものである。

(52) 香織「来年、どうなつてんのかな……私……」(p. 66)

この例は、野田が言うとおりの既定性では何もいえないが、「のだ」が話者の認識プロセスを経由したことの表出というように考えれば、この文もその線から問題なく理解できることが分かる。

[4] 妥当性のチェック

ここで、前節までに河本が提案した原理が「のだ」の他の例文をどれほど説明できるかを見てみることにする。野田の分類を利用して例文を見てみることにする。

非関係づけの対事的「のだ」

まず、この分類の中の次の例はどうであろうか。

(53) その時、襖が開いて、入ってくる三上。一同、歓声。(pp. 86-7)

さとみ「————」

さらに続いて入ってくる、リカ。

リカ「え、こんなに一杯いるんだ————」

(54) こんなに一杯いる。

これらを比較し、野田は『のだ』を用いていない(54)は、その場で見たままをQと表現しているだけだが、『のだ』を用いた(53)では、話し手はQを、認識していなかった既定の事態として捉えている」と述べている。「既定の事態」というのは河本には腑に落ちないという感じである。河本の言い方では、「その場で見たままをQとして表現しているだけ」というのが「話者の認識プロセスを経由していない」ことであり、「話し手がQを認識していなかった既定の事態として捉えている」というのが、「話者の認識プロセスを経由したことを表出している」ということになる。(53)の「こんなに一杯いるんだ」が、「こんなに一杯いる」ということを驚きと共に認知し、振り返ってその事実を認識しているということになるが、この方が語感に沿っていると思う。(53)と(54)との違いは認知の後の認識プロセスの有無に呼応しているというのが妥当である。同じように次の例を見てみよう。

(55) そうそう、思い出した、ここにポストがあるんだ。

(56) こんなことならバントするんだった。

これらはこの分類の中でそれぞれ再認識、後悔の例として野田で取り上げられているものだが、河本から見れば「話者の認識プロセスを経由したことを表出することによって、即ち、心的（再）認識プロセスを経る際、事態を状況の中で考えて、それぞれ再認識、後悔の機能が生み出されている」ということになる。そして、これはそれぞれが持つ機能をうまく説明していることが分かる。

原理(T)、(S)を仮定しながら各例文を見てみると、「のだ」の機能というのは、瞬間的なものであることが分かる。つまり、「認識プロセスの経由」というのは、心的な行為で、この行為が発話（言語行為）の中で瞬間的に行われるわけである。(53)と(54)の違いは、この認識プロセスの有無というように結論付けられるが、当然のことながら、(53)と(54)の両方で、事態の知覚は同じようになされているが、その知覚をそのままの形でストレートに表現するか、「評価」を交えた認識プロセスを通し、それを「のだ」というシグナルで表出するかどうかの違いである。(55)、(56)の例では、評価的なものの1つとしてそれぞれ再認識、後悔の機能が生じているということになる。

「のだ」による関係付け

次は、前に取り上げた例と同じようなものであるが、検証してみよう。

関係づけの対人的ムードの「のだ」

(57) (対話) 遅くなってごめん。バスが遅れたんだ。(p. 92)

(58) 「克彦も犬が好きでした」(〃)

「のだ」を用いない(58)でも「聞き手が認識していないことを述べるというのは、平叙文に共通する性質である」と野田は述べており、「のだ」を用いた(57)では、野田は「対人的『のだ』を用いることによって、聞き手が認識していないことを認識させようという話し手の心的態度が表される」と述べている。これも河本では、「の」による名詞化が「話者の認識プロセスを経由した」ことを表出していることによるものとする。この場合、(57)ではPに対する理由としてQを述べているということが、「のだ」によって示される認識プロセスの経由から特に明示されているということになるが、これも合理的な理解と思える。

他の要素との関係付けを示すムードの「のだ」は、それ自体が関係付け機能を第一義的に持っているものではない点が再度強調されなければならない。このことは、先にも述べたように、「のだ」の「の」、「だ」がそれぞれ名詞化、断定であり、「関係付け」ということを本質的に持っていないことに起因している。したがって、関係付けをいわば派生的機能として持っているだけで、実際の関係付けは聞き手側からすれば、聞き

手が行わなければならないことである。つまり、前接する部分の「の」による名詞化は「文の内容が、何かある状況の中で他の要素と絡めて捉えたものでありますよ」、と述べていることになる。これは「のだ」以外で現れる「の」とおそらく共通する特徴、効果であろう。例えば次の例でそのことが分かる。

(59) 生きることは難しい。

(60) 生きるのは難しい。

(60)は何か現実の「生きること」に絡んだ具体的、体験的なものがあることをニュアンスとして持っていると感じられる。この「の」と「のだ」の「の」は名詞化ということでは同じであるが、「のだ」の場合には、根本的原理(S)が他の「の」の場合より強く働くだけで、(60)の場合にも、根本的原理(S)は働いているように思われる。

非関係づけ対人的ムードの「のだ」一告白

例えば野田は告白を表すものとして次の文を挙げている

(61) 僕って、めかけの子なんです。(p. 93)

(62) ぼくは実は明日、日本人の実業家と会うことになっているんです。(〃)

これらの文がもっている告白(卑下)のニュアンスは、「のだ」に前接する命題部分を、話者が自分の(再)認識プロセスに通す行為により、話者の告白(卑下)のニュアンスが聞き手に伝達されるというわけである。そのほかに野田は「教示」、「強調」、「正誤訂正」などの例文も挙げているが、いずれも告白と同様、それらは河本の言う“評価”の一側面と理解できる。

これらの「のだ」に対し、野田は、「のだ」が「聞き手は認識していないが、話し手は認識している既定の事態Qを、聞き手に認識させようとする」ことであると述べ、「そこから、『告白』、『教示』、『強調』といったニュアンスが生じる」と述べている。河本としては、既定ということがすべてに共通していることは分かるが、「のだ」がそれを「相手に認識させようとする心的態度」というのでは特徴づけとしてはあまりに弱く、やはり「のだ」に前接する部分の内容を「の」により話者が(再)認識するプロセスに掛けることが根本にあり、この認識プロセスの中で、広義の評価である「告白」などの意味・機能が生まれて来ると見るほうが説明としてよいと思われる。この場合にも河本の原理(S)、(T)でうまく説明できたことになる。

応答文の「のだ」

次のように、質問文に答える応答文に現れる「のだ」を見てみよう。

(63) 和田 今話題の『エレファント・マン』とか、ああいうものはご覧になっていますか。(p. 140)

向田 見てないんです。あれとか『ブリキの太鼓』あたりは見たいなと思っているんですけど。

(63)' 見てません。

(64) 「薬は効いてますか」

「それが、あんまり吞んでいないんです。」

(64)' 「それが、あんまり吞んでません。」

このような応答文の中に現れる「のだ」について、それは話し手が「自分の応答文の内容を聞き手に認識させようとしている」と野田は述べている。やはり、この側面があることは河本も感じる。それではなぜそのような機能が働くのか、ということが次に知りたいことである。河本流に言えば、(63)'のように「のだ」を用いる必要はないのだが、「のだ」を用いた場合、「のだ」の前接する部分の内容に対する話者の(再)認識プロセスにおいてなされる“評価”の一つが、そのような機能になっていると説明することができる。質問に直接的に答えているだけの(60)'と比較した場合、野田の解釈以外に丁寧さも生み出されていると河本には感じられる。このことは、やはり「見てない」の部分が「のだ」を従えることにより名詞化することから生じる効果と考えられる。また、質問に直接的に答えていない(64)'の場合には、間接的に答えることから来る遠慮の気持ちも表出されると河本は考える。まとめると、ここでのムードは事態に対する話者の広義の“評価”の一部分であり、直接的な返答に少し手を加えることによる丁寧さ・遠慮などの表出と見ることができる。次では(66)を野田は不親切な応答と分析しているが、この場合も同じように考えることができる。

(65) 「じゃどうして返事しなかったの？」(p. 139)

「今日はあまり返事したくなかったんだ」

(66) ??「今日はあまり返事したくなかった。」(〃)

野田の言う「Pの事情を知りたいがっている聞き手に対して、Pの事情Qを答えるときは、関係づけの『のだ』を用いた文が自然である」(p. 137)というのは「のだ」の用法として間違いなからうが、そこには河本の原理

(S)、(T)が働いているからと考えたほうが当たっていると思う。「今日はあまり返事しなかった」を質問と絡めて考え、自分の答えの内容を検討評価するプロセスを通したことを表出することにより、親切な応答になる、という仕組みである。

質問文の「のだ」

野田は、「質問文に『のだ』が用いられるのも、『のだ』を用いた質問文では、事態を既定のものとして捉えていることが示されるためだ」と考えている。

(67) (さがしていた人を見つけて) (p.127)

ここにいたんですか？ さがしたんですよ。

(68) こんなにおいしいのに 食べないの↑(〃)

確かに、これらの場合、既定ということは言われれば感じられる。既定というのは「ここにいた」「食べない」が示す内容であろうが、これらは話者が認知したところの事態でもある。この認知に「の」が続き、話者による認識及びそれに伴う評価が行われたことを示しているとする河本の解釈のほうが、やはり語感に沿うもので妥当性が高いと感じられる。(67)では、認識する際、“人に迷惑をかけて”という話者の怒りも状況によっては感じられるが、それが評価である。即ち、河本としては、やはり原理(S)、(T)が働いていると考えるべきだと結論付けたい。次も既定の事態であることを示しながら問うていると考えるのが尤もであると思われる。少しだけ違う例ではどうであろうか。

(69) 「これ、食べていいの？」(p.126)

(70) 「これ、食べていい？」(〃)

確かにこの場合、(69)は『食べていい』かどうかが規則で決まっているか、聞き手がすでにそれを定めているかだと、話し手がみなしているときに用いられる」という野田の説明は内容から言って正しい。しかし、次の例ではどうか。

(71) 「これ、見えるの？」

(72) 「この問題、解けるの？」

このような能力を問うような質問で「の」が使われている場合、何が既定になっていると考えるのか分からない。これらは相手の能力を問うていて、既定らしきものが存在する状況が考えられないわけではないが、そうでない場合が多いだろう。河本流に言い直せば、この場合、認知部分はなく、「見える？」、「解ける？」のかという話者の疑問から、この答えについて想像を働かせている、あるいは働かせたことがあるということが「の」で表出されていると考えられる。やはり、既定性ということを含むさらに広い捉え方が必要であることを示しており、その広い捉え方というのが河本の主張するところである。即ち、当該状況の中で“評価”しようとする話者の認識行為の存在が表出されているのが「の」である。その評価として、ここでは「本当に可能か、話者は自信がない」ぐらいに感じられる。

非関係づけの対人的「のだ」－物語で現れる「のだ」(p.100)

次の例文にあるように、書き言葉の中に現れる「のである」については、野田は「Qが既定の事態であることを話し手が聞き手にことさらに伝える場合や教示的な場合などに用いられる」としている。しかし、野田はこのような(p.102)非関係づけの対人的「のだ」が既定の事態として提示することであると認めながらも、それがこの場合の「のだ」では適用しないと述べているようだ。河本流に言えば、「のである」により、「語り手の認識プロセスを経由したことを表出する」ことであり、その評価として、語り手が文脈の中で、強調などの重点を置くための1つの手段として使用されている、ということになる。

(73) 頭がおかしいんじゃないのかな。新手の訪問販売だろうか。頭の半分で、僕はめまぐるしく対策を考えた。(p.100)

すると、彼女はこう答えたのだ。

「あのね、あたしはサトシ君のお父さんの恋人よ。で、この子はあたしと彼の子供」

(74) 「あのね、さっき道を聞かれたの。それで、教えてあげたら、すごく丁寧にお礼言われたの。嬉しかったなあ。」(p.101)

(73)では驚き、(74)では不思議さなどが話者の評価として表されていると考えるべきで、既定とか教示的というのは全く当たっていないと思われる。

スコープの「の(だ)」

野田は、外見上同じように見える「のだ」の文を、概念的には従来からの研究どおり、スコープの「の(だ)」

とムードの「のだ」に分類している。前者は典型的には次のような例である。

(75) 「あたし、悲しいから泣いたんじゃないのよ」(p. 36)

(76) *「あたし、悲しいから泣かなかったのよ」(〃)

これは、「の」による名詞化において、“否定のスコープ”がその名詞化された中の要素に関係するかどうかの問題である。「悲しいから泣かなかった」を塊とするか、しないかの問題といってもよい。このことに関し、野田は次のような益岡 隆志の意見を取り上げ、彼の意見を否定はしていないが、特にそのように考える必要はないという立場を取っているように思われる。

(77) 選手達は泣いていない。(p. 37)

(78) 選手達は泣いているのではない。(〃)

これらは否定の焦点が異なるという久野 暉の主張に対し、益岡は「両者の違いを表現形式の違いとしている」と野田が引用している。今回、時間の関係で益岡の主張を直接参照する余裕はなかったが、この益岡の主張は、河本の主張に合致している部分があるように思われる。それは(78)の「のだ」の文に関し、“事態の叙述様式が適切であるか否かの判断にかかわる”文であるというのが益岡の主張であるが、『の』が認識処理プロセスの経由を表出するものであり、評価がこの場合、叙述様式の適切さへの思いということになり、河本の主張と符合しているように思われるからである。したがって、スコープの「の(だ)」は今回、十分に考察する余裕はなかったが、予測としては、ムードの「のだ」の場合と同様、「の」が名詞化の働きをする際、それが話者の心的認識処理プロセスの経由を表出するものである、という考えで統一的に理解できると考えるものである。

まとめ

このように、「のだ」の本質を既定性ということに関係付けるような、野田をはじめとする従来の研究では、すべての「のだ」の用例を説明できないことは野田が認めるとおりである。しかし、「のだ」が「の」と「だ」の組み合わせであり、「の」が認知したばかりの事態や既に前から把握している事態を認識したり、再認識したりする、話者の心的認識プロセスの経由を表出するものであり、「だ」は断定であると考えれば、これはすべての「のだ」に共通する性質であると言ってよいことが分かった。この認識、再認識プロセスの際に広い意味での話者による“評価”が行われ、それが「のだ」が使われる条件としてこれまで研究されてきた機能分類になっているわけである。そして、なぜ「の」がこのような機能と結びついているのかをさらに説明するものとして、他の箇所でも現れる「の」の現実指向性が基にあるのではないかと推測するものである。できるだけ現実に存在するものとして捉えようとする心的行為が、この「の」の根本にあるのではないだろうか、ということである。

参考文献

- 1) 野田 春美 「の(だ)」の機能」(日本語研究叢書9) くろしお出版 1997
- 2) 森田 良行 「日本語の類意表現」 創拓社 1988

Recognition Process existing in the use of *noda* in Japanese Sentences

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2004; accepted November 5, 2004)

The purpose of this paper is to account for the Japanese modal form *noda*, which has been classified according to its function. It is clear that *noda* consists of *no* and *da*. *No* has been known to make the preceding clause to be a noun clause, but we propose here that this *no* has another function of signaling that the preceding clause has just been “evaluated” in the mind of the speaker or writer when this sentence is used. This evaluation comes from considering the content of the clause within the situation or the context, and induces functions like command, explanation, emphasis and confession. After having examined various sentences containing *noda*, we have found that our new proposal here explains the difference between the sentences with *noda* and the sentences without *noda* better, and reflects better the sense of the native Japanese speaker in using *noda* better than the preceding studies.